

6:1 ダビデは再びイスラエルの精鋭三万をことごとく集めた。
6:2 ダビデはユダのバアラから神の箱を運び上げようとして、自分とともにいたすべての兵と一緒に出かけた。神の箱は、ケルビムの上に座しておられる万軍の【主】の名でその名を呼ばれている。
6:3 彼らは、神の箱を新しい荷車に載せて、それを丘の上にあるアビナダブの家から移した。アビナダブの子、ウザとアフヨがその新しい荷車を御した。
6:4 それを、丘の上にあるアビナダブの家から神の箱とともに移したとき、アフヨは箱の前を歩いていた。
6:5 ダビデとイスラエルの全家は、堅琴、琴、タンバリン、カスターネット、シンバルを鳴らし、【主】の前で、すべての杉の木の枝をもって、喜び踊った。
6:6 彼らがナコンの打ち場まで来たとき、ウザは神の箱に手を伸ばして、それをつかんだ。牛がよろめいたからである。
6:7 すると、【主】の怒りがウザに向かって燃え上がり、神はその過ちのために、彼をその場で打たれた。彼はそこで、神の箱の傍らで死んだ。
6:8 ダビデの心は激した。【主】がウザに対して怒りを発せられたからである。その場所は今日までベレツ・ウザと呼ばれている。
6:9 その日、ダビデは【主】を恐れて言った。「どうして、【主】の箱を私のところにお迎えできるだろうか。」
6:10 ダビデは【主】の箱を自分のところ、ダビデの町に移したくなかった。そこでダビデ

は、ガテ人オベデ・エドムの家に戻った。

6:11 【主】の箱はガテ人オベデ・エドム家に三か月とどまった。【主】はオベデ・エドムと彼の全家を祝福された。

6:12 「【主】が神の箱のことで、オベデ・エドムの家と彼に属するすべてのものを祝福された」という知らせがダビデ王にあった。ダビデは行って、喜びをもって神の箱をオベデ・エドムの家からダビデの町へ運び上げた。

6:13 【主】の箱を担ぐ者たちが六歩進んだとき、ダビデは、肥えた牛をいけにえとして献げた。

6:14 ダビデは、【主】の前で力の限り跳ね回った。ダビデは亜麻布のエポデをまわっていた。

6:15 ダビデとイスラエルの全家は、歓声をあげ、角笛を鳴らして、【主】の箱を運び上げた。

ウザが「ひっくり返しそうになった」神の箱を「押さえた」というだけで、神様から打たれて死んだというのは、いかにも理不尽に思えるかもしれませんが。しかしそのような人間の常識では考えられない出来事の中に、神の真理が隠されている場合が多いのです。

実はウザに限らず、人間は誰でも罪があるので、聖なる神様の前では生きられない存在です。しかし神様は、ご自分が決められた罪の贖いの方法によってのみ、罪が赦されて神の前に出られるということを知ってくださっていたのです。

ウザはそのことを忘れていました。自分が神に触れても当たり前のように、その罪も神の聖なることに無感覚になっていたのです。もしもそれが赦されていたとしたら、神までもが人間の罪

に無感覚になってしまったということになります。人は勝手に罪を犯すようになってしまい、それを止める神の力が無くなってしまうのです。

これはまさにイエス様の十字架の救いと同じです。信じなければ救われませんが、それは人間のもともある罪のためです。唯一つ神様が命をかけて身代わりとなってくださった十字架の救いをないがしろにして、勝手に神のもとに行って神に触れるなどということはできないのです。

主の救いを感謝しましょう。また勝手に人間の判断で主のみこころを無視していないか考えて見ましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

